

唯物史観より人口史観へ（Ⅷ）

——人口哲学の概要——

別 府 芳 雄

まえがき

人口哲学は亡き南 亮三郎先生の終生の悲願とされたテーマであった。
先生は昭和60年4月26日、脳出血のためご逝去された（88歳）が、亡くな

出版社からこんな書評の掲載誌を
送ってきました。黒田さんはあな
たもよく知っている「人口」の間屋
さん。
この評を見ると、やっぱり「人口
哲学」が世の注目を浴びているら
しいですな。あなたは立派な哲学
者。どうぞ、わたしに代ってよい
人口哲学を書いて下さい。

られる2ヵ月前（2月4日付）、筆者あてに左
記のようなお便りを下さった。このお手紙のな
かの「わたしに代って人口哲学を書け」——と
いうお言葉のうちに、最後まで「人口哲学」を
めざしておられた先生のご執念が伝ってくるよ
うな気がする。先生は『左右田哲学への回想』
のなかで次のように述べておられる。「左右田
先生をしのぶこの一文の終りに、自分の感想を
つけ加えて恐縮ですけど、私はここらあたり

で「左右田」先生の学問の世界に立ち帰りたいような気がします。
人口論と哲学、その結びつきはないものでしょうか。ことに今日のように
人口政策の論議がさかんになると一層その必要を感じます。いわば「人口
哲学」といったような新たな学問世界が開かれるように思います。しか
し、私の場合、日はすでに西に没しようとしています。（昭和50年5月11日
左右田博士50年忌記念会にて）」（『左右田哲学への回想』創文社、昭和50
年、259ページ、傍点引用者）と。（南先生79歳時）。なお『人口論五十年の後』

の「編 1.人口」の V.「マルサスの "人口の原理"」の末尾にも同様の記事がみられる。(昭和52年 1 月29日・人口学研究会報告・80歳時)。なお『人口論六十年』の「経済哲学者左右田博士の回顧と人口論」にも同文の記事がある。(119-120ページ, 昭和57年 5 月・85歳時)。晩年の南先生が完成しようと念願しつつ果しえなかったものが "人口哲学" (人口論と哲学の結びつき) であったということである。なお方法として——先生は「わたしは近年, 特色的な歴史の見方が実現するのではないかと思っている。それはおそらくマルクスやエンゲルスの歴史観と隣り合わせの, しかもそれとはまったく異った歴史観が成り立つであろう。わたしはそれを人口史観 (Population Interpretation of History) と呼びたい。マルクスとエンゲルスが若いころに亡命先で構想したまま未刊行に終わった《ドイツ・イデオロギー》の一節 "生の生産と再生産" (Produktion und Reproduktion des Lebens) をきっかけにマルサスの思想を取り入れて, そのうえに, これを築きたい……………それと同時に, わたしは最後の置きみやげに "人口哲学" (Population Philosophy) なるものを構想したい。殊に "人口" がさまざまな分野での探究とともに人為的政策の対象となるとき, 最後の決め手となるのは "人口哲学" であろう。マルサス自身でさえ手をつけ得なかった "人口史観" と "人口哲学" ——その新世界に構想を進めていきたい」(『人口論六十年』千倉書房 昭和59年, 91-2 ページ) と述べておられる。

考えてみると——1 国民あるいは1 民族の人口は, その民族の繁殖態度 (Fortpflanzungsverhalten) によるものであり, その民族の繁殖態度はその民族 (あるいはその国民) の繁殖倫理 (Fortpflanzungsethik) に基づく。そして繁殖倫理がその民族の文化を示すものとすれば, その民族の人口様式 Bevolkerungsweise (その時代の特色的な人口要因の組み合わせ) は "文化価値" をもち, "歴史性や社会性が^か関わるもの" (左右田) と考えねばならない。ところが歴史は必ずある基準を前提とするものであるから "歴史は価値に対する対象の^か関係に立つ" (ヴィンデルバント) ものである

る。こう考えてみると人口論と哲学の結びつきは当然でてこざるをえないものであるから、人口史観の礎石としての人口哲学は堂々と提唱しうるものとなる。つまり哲学が "知の総計" であり, "方法" であり…… "社会の運動と一体をなす" ものとして「真に哲学的であるためには, この哲学という時代の鏡 (miroir) が当代 (その時代) の知の全体化 (la totalisation du savoir) としてあらわれなければならない」(サルトル) とすれば, 人口様式はその民族の "知の総計" であり, その民族の "社会の動き" を示しているわけであり, その民族の歴史発展の段階を示す。したがって人口様式からその民族の歴史的発展を知りうることになるから, ここに人口史観と名付けられるべき歴史観が生まれることになるばかりか, "人口論と哲学の結びつき" が十分に可能となる。すでにマルサスは「すべての民族とすべての時代の生殖過程を, 人間の繁殖態度からみるならば 1 つの法則性が成り立つ」(マッケンロート) ことを見抜いていたのである。

今回, マルサスが構想していた人口史観について, その構造を明らかにするとともに, 人口哲学と歴史理論 (人口論と哲学の結びつき) について述べて, 亡き恩師の学恩に報いたいと思う。

I いわゆる人口史観

マルサスが東インド大学教授に就任したのは1805年 (39歳時) であり, 彼は1834年 (68歳) で逝去するまで近代史および経済学を担当した (30ヵ年も)。だから彼がすぐれた経済学者であったばかりか, 歴史学の専門家であったということは容易に察せられよう。しかし歴史学者マルサスについて語る人はこれまでいなかった。『人口原理論』(または「人口論」ともいう) —— というと人口問題を論じたものと早合点されているが, 『人口原理論』は「人口問題を自己目的としてあらゆる側面から照明しようとし

た概論書ではない。照明の対象は、むしろ、人口問題ではなくて、社会問題であり、その照明の手段が人口原理であった。この原理によって社会問題は、その解決の可能性にむかって探究された¹⁾ものであるばかりか、マルサスはイギリスの大哲学者B.ラッセルが述べたように「たんなる議論上の武器²⁾」として「人口」を用いたにすぎない。この点はもともとマルサス32歳時の匿名の初版（1798年）の序文で「この論文はもとゴッドウィン氏の『研究者』Enquirer中の論文Mr. Godwin's Essayの問題すなわち貪欲（どんよく）と浪費とについて、私が、1友人と交換した会話に由来するものである。この議論は社会将来の改善に関する一般的な問題を提起するに至った³⁾」と述べているので明らかなように、マルサスの当初の意図は人口問題そのものよりも「社会将来の改善」という当時の時事問題であった。『人口原理論』の第2版以降の副題はすべて「人類の幸福に対するその過去および現在の諸影響」という側面から観察しているということが明示されているから——『人口原理論』の主目的は「人口」を手段として人間歴史の解明に注がれていたと考えるべきである。それどころか、第2版（1803年、マルサス37歳時）の序文では「議論を進めていくうちに私はおのずから現存社会状態におよぼすこの原理の結果の考察へと導びかれた……この論文（初版のこと）が喚起した社会の注目程度に鑑みて、私は、私の余暇の読書を過去現在の社会状態に及ぼせる人口原理の結果の歴史的検討に費すことに決心した⁴⁾」とハッキリ歴史的検討に向う決意を示している（マルサス37歳）。もし、人口について述べるつもりならば、表題はOn the Population（人口論）でいい。ところがAn Essay on the Principle of Population（人口原理に関する1論）となっている理由は——やはり前記第2版序文の示すごとく、人口原理の結果の歴史的検討を志していたと考えるべきであろう。

そして学としての歴史を学ぶためには、ヴィーコ（Giovanni Battista Vico 1668-1744）の『新しい学』を知らねばならなかったが——マルサス

もヴィーコを学ぶことによって、"学"としての歴史は、まず原理（公理・公準）を設定して——幾何学のように——命題をつくり、各時代の個性（特徴）について、その命題が妥当することを示す必要があることを知った。だからマルサスの人口史観の構想は——のちに述べるが——マルクスやエンゲルスと同様にイタリアのヴィーコの『新しい学』に由来する。★

★ ヴィーコの『新しい学』はマルクスやエンゲルスの歴史観形成に大きな役割を果たしている。すでにヘーゲルも『哲学史講義』のなかでヴィーコに触れてはいるがマルクスも1862年4月18日、エンゲルス（在マンチェスター）あての手紙でヴィーコについて述べている。また1862年4月28日、ラッサール（在ベルリン）あての書簡では「気になったのは、君がヴィーコの『新しい学』をまだ読んでいないように思われることだ……ヴィーコのなかに、おびただしい天才的なものが萌芽的にふくまれている」（『全集』第30巻書簡集1860-64年、大月書店503-4ページ）と書いているし、エンゲルスも1890年3月30日、アントニオ・ラブリオーラ（在ローマ）あての手紙で「これ（歴史の客観的法則性の規定）こそ、マルクスと私がずっとまえから特別関心をよせていたテーマです。ヴィーコの祖国からのわがドイツ哲学に造詣のふかい学者の手になる新たな寄与は、当然私の完全な注目を要求します」（『全集』第37巻、邦訳322ページ）と書いている。マルクスは『資本論』第1巻第4篇第13章「機械装置と大工業」においていう——「けだし、ヴィーコのいうように、人類史はわれわれのつくったものである。しかも自然史はそうではないという点に、人類史と自然史の区別があるのだ」（K. Marx, Das Kapital. Bd. I. IV. Die Produktion des relativen Mehrwerts, 13 Maschinerie und Grosse Industrie, S.386、傍点原著者）と。マルクスやエンゲルスらに与えたヴィーコの影響力の激しさが想像できよう。

こんにちまでマルサスの歴史観（人口史観）について述べた論著が全くないことがむしろ不思議である。

マルサスは大学生活の終り頃（彼は1784年、18歳時にケムブリッジ、ジーザス・カレッジ（Jesus College Cambridge）に入学、哲学と神学を学び、1788年、22歳時卒業）。以来、歴史学に興味を抱き始め1788年4月17日付の父あての手紙ではギボン（E. Gibbon 1737-94）の『ローマ帝国衰亡史』The History of the Decline and Fall of the Roman Empire（第1巻

1776年2月出版、第2巻、第3巻は1781年出版)を読んで深い感銘を受けたことを報告しているが(マルサス22歳時)、——彼は、この頃から人間歴史の見方について、人口増加という根本事実から人間歴史を解明するという彼独特の見地を思い付いたように思われる。というのはギボンの『衰亡史』はアジアおよび北欧諸民族の大移動を描いたものだが、このところには食糧と過剰人口の関係からの解説があるのみならず、ローマの滅亡が蛮族の侵入のためでなく(ローマ1,000年の歴史を通じて、いつも外敵の危険があったのだから)、キリスト教のせいでもなく——じつに人口減退のせい(名門の家系には子供がなかったし、農村も産児制限をおこなって過疎化す)——という指摘があるので、この発想がマルサスの人口史観形成の萌芽をなしたものと考えられる。★

- ★ たとえばギボンは第1巻第36章で「大西洋からアルプスにいたる諸州の喪失または荒廃は、ローマの栄誉と偉大とを傷つけた……強欲なヴァンダル族(the rapacious Vandals)は、これまでローマ庶民の貧困を救い、かつ、その怠惰を助長してきた定期的な穀物供給(regular subsidies)を遮断[横取り]した(E.Gibbon, The Decline and Fall of the Roman Empire, Encyclopedia Britanica, INC 1952 Vol 1. Chapt. XXVI p.571. 村山勇三訳『ローマ帝国衰亡史』岩波文庫[五]231ページ)「古代ローマの廃墟に哀悼の眼を投げかける観察者は、ともすればゴート族やヴァンダル族(Goths and Vandals)を責める気になるが、しかし実際は彼らはこのような災害を与える(perpetrate)ような閑暇も能力もまたおそらく意向も持たなかったのである」(ibid., p.578. 邦訳[五]251ページ)。また「減少したローマの民衆(the diminished crowds of the Romans)[人口減少]は、浴場や柱廊(porticos)などの広大な空地[場]に淋しく点綴した……広大な図書館や裁判所は無用となった」(ibid., p.578. 邦訳[五]251ページ)「ロムルス・アウグストゥス(Romulus Augustus)の生命はオドアケル(Odoacer)の寛大な慈悲で助けられた」(ibid., p.591. 邦訳[五]288ページ[しかし、ロムルス・アウグストゥス帝が廃位されても後継者が扱ばれないで、西ローマ帝国は崩壊する]。第1巻、第38章末尾の「西ローマ帝国崩壊の概観(General observations on the Fall of the Roman Empire in the West)では——「ローマの衰頹は放埒な隆盛(immoderate greatness)の自然・不可避の帰結であった。繁栄は衰亡の本質を成熟せしめた。……われわれは何故にローマ帝国が破壊されたかと尋ねる代りに、むしろどうしてそのように

長いあいだ存続したかを驚くべきである」（*ibid.*, Chapt. X X X Ⅶ p.631. 邦訳〔五〕401ページ）「来世の幸福は宗教の大目的であるから、キリスト教の輸入が、いや、少なくともその濫用がローマ帝国の衰亡に若干の加勢（some influence）を与えたとの言は、われわれが驚愕も恥辱もなく（without surprise or scandal）聞きうるところである……しかしキリスト教の純粹無垢な感化は北方の蛮族〔帰依者〕らに与えた不完全ながらも福利に満ちた影響の中におそらく見出されるであろう。よしローマ帝国の衰亡がコンスタンティヌス（Constantine）の改宗によって早められたとしても、かの勝利の宗教は帝国の崩壊の激烈さを打ち壊して征服者らの狂暴な性質を和らげた」（*ibid.*, p.631-2. 邦訳〔五〕403-4ページ）に違いないのである。また「ローマ人は彼らの危険の範囲と敵の数とを知らなかった。ラインおよびドナウの彼方には、すなわち欧亜の北方諸地方には狩猟や牧羊を業とする貧乏で健啖で短気な無数の蛮族（innumerable tribes）がみちみちていた。しかも彼らは武事に大胆であり、勤勉な産業の果実を荒したがっていた。蛮族の世界は迅速な戦争の衝動に動かされており、ガリアまたはイタリアの兵たちは遠い遥かなシナの革命によって奮起させられていた。強力な敵に追われたフン人（the Huns）は西方へと移動した。そして彼らの奔流は途上で次第に付け加えられた捕虜や同盟部隊によって膨脹した。フン人にうち負かされて逃亡した諸部隊は、こんどは順次に征服精神を帯びていった。果てまなき蛮族の従隊は積み重ねられた重量〔大軍〕となって、ローマ帝国に殺到した」（*ibid.*, p.632. 邦訳〔五〕405ページ）——第41章以降は第2巻となる——第42章「蛮人世界の状態——ロンバルト族のドナウ河畔の植民（State of Barbaric World, Establishment of the Lombards on the Danube）では「ローマ帝国の正規軍はかつて64万5千に達していた。それがユスティニアヌス（Justinianus 483-565）時代には15万に減少した。しかも諸所方々の海陸の防衛は薄く撒布された。つまりイスパニア（Spain）、イタリア、エジプト、ドナウの河岸（banks of the Danube）、黒海の沿岸（coast of the Euxine）およびペルシアの辺境（frontiers of Persia）などに分布された。しかしローマ市民はほとんど尽（つ）き果てていた。しかも兵たちは満足に給養されなかった」（*ibid.*, Vol II . p.32. 邦訳〔六〕212-3ページ）——また第43章の「アフリカの暴動」（Rebellions of Africa）——「トティラのゴート王国再建」（Restoration Of the Gothic Kingdom by Totila）——「ローマ市の争奪」（Loss and Recovery of Rome）では「イタリア中部諸州の不顕著な市邑を兵力または投降勧告によって征服し終ると、トティラ（Totila）は旧都（ローマ）を包囲して糧食攻めにしようと着々と作戦行動を進めた」（*ibid.*, Vol II p.55. 邦訳〔七〕30ページ）「飢餓はローマ守備軍（garrison of Rome）の実力と軍紀を頽廃させた」（*ibid.*, p.56. 邦訳〔七〕34ページ）「ローマ市民らは各自の妻子を携えて八方に追放させられた。そしてローマは40日間に荒涼たる寂寥の地（desolate and dreary solitude）となってしまった」（*ibid.*, p.57. 邦訳〔七〕36-7

ページ)。また第69章「第12世紀以後のローマ市の状態」(State of Rome from the Twelfth Century)では「初期の時代から法王の富は羨望の的となり、彼らの機能(power)は反抗の原因となり、彼らの身柄(persons)は暴行の目標となっていた。しかし法冠(mitre)との長年月の抗争は彼らの敵の数を増加し、かつ、その激情を煽動した」(ibid., p.559.邦訳[十]284ページ)「産業の進歩はイタリアにあまたの共和国を産出して繁栄せしめたが……それら各共和国の自由の時代は人口、農業、工業および商業の最も隆盛な時代であった。しかしローマ市の立場は一段と不利(less favourable)で、その地域はずっと不毛(less fruitful)であった。住民らの性格は怠惰によって墮落し傲慢によって浮薄になった。そして彼らは各属藩臣民の朝貢(the tribute of subjects)がつねに教会と帝国の首府を給養するのが当然だという思想を勝手にいだいていた」(ibid., p.570.邦訳[十]314ページ)。またゲルマン人のローマ征服についても第71章で「北方の征服者らは、大げさな破壊観念や復讐観念を抱くほどに野蛮でもなければ、また洗練されてもいなかった……破壊するよりもむしろ礼讃する方に傾いていた。ゴート軍は第6日目にローマ市を撤退し、ヴァンダル軍は14日目に撤退」(ibid., p.592.邦訳[十]380ページ)してしまったのだと。——ご覧のようにローマの衰亡を“人口”と“食糧”から解明している。ゴート族はローマを少しも破壊してはいない。

ランケ(Leopold von Ranke)も「ローマ帝国は十分に多産的ではなかった。荒廃をもたらす内乱、漸次おこってきた結婚忌避(Eheabneigung)、その他の理由から帝国は底知れぬ人口減退(eine unendliche Abnahme der Bevölkerung)に悩んだ。キリスト教が禁欲主義的傾向(mönchische Tendenz)を公布していたからである」(L. Ranke, Über die Epochen der neueren Geschichte, Verlag von Duncker & Humblot, 1917 S.34.『世界史概観』鈴木威高ほか訳岩波文庫73ページ)——とローマの衰亡を人口減退から説明している。

マルサスはヴィーコ(Giambattista Vico 1688-1744)の『新しい学』を学ぶことによってcertum(個々の事実認識)から——verum(普遍的真理)にいたるという“verum-factum”(真に知りうるものは作られたもの)の公式から歴史学には先験的真理(a priori truth)が前提されなければならないことを学びとる。初版『人口原理論』は彼が大学を卒業してから10年後に公刊されたものだが、ここに先験的真理が“公準”として述べられる。★

★ ヴィーコはいう——本“学”はこれらの原理にもとづきつつその所論を展開

する [332]。これらの公理は、あたかも生物の体内を血液がめぐるよに、諸民族共通の本性について、この "学" が説明していることの全体を貫流して、これに生命を与えてくれる [119]。この公理は、次の定義 [命題] とともに、民族の始祖に関する新しい批判方法を提供する [143]。この真実の根拠を探し出すことがこの "学" のもう 1 つの大きな努力目標である [150]。「ヴィーコ」(『世界の名著』33清水幾太郎編，中央公論社 昭和54年)

もし歴史をヴィーコのいうように「あらゆる民族は勃興・発展・停滞・衰退・終焉を時の流れのなかに刻んでゆく」[244] ものとする——人間の歴史がある目的をもって終末へ向かうものとする——「社会という世界は明らかに人間によって作られたものである⁵⁾」から、人間は常に歴史のなかにいるわけであり、したがって人間は歴史的存在であるといい換えることもできる。さらにこの作ったものの過程を把握し叙述することは当然、可能なわけである。この "相対的なもの (認識) の絶対化" それが歴史哲学であるが——その場合、"人間の歴史がある目的、終末に向かって進転する" という進歩・発展史観をもつ場合には、必ずある特定の前提が必要となってくる。1 時代、1 文明のもつ個性 (特徴) を認めて、それを前提したものから辿ってみる必要がでてくる。いい換えると、歴史における客観的法則性を認めて、歴史の流れの動力としての起動力を何に求めるかということによって歴史観がえられることになる。マルサスは歴史発展の動力を人口増殖の力学に求めたといえよう。

この点についてクーノウ (H. Cunow) の説明によると、クーノウはヴィーコの『新しい学』(1725) を紹介しつつ "世界の全経過 (der ganze Weltverlauf) はつねに神の摂理 [神意] (göttliche Vorsehung) にしたがって実現される" もので、しかも "その神意は人間の行為を、ヨリ高い目的を実現すべく使う" ものだという。すなわち「人類の発展はつねに一定の方向に向かって築かれる人間精神の発展によってきめられていく。あらゆる歴史的事件 (alles geschichtliche Geschehen) は、精神発展の作用 (Wirkung der Geistesentwicklung) なのだ。したがって全世界史 (die

ganze Weltgeschichte) は徐々たる精神の進歩 (ein allmählicher Geistesfortschritt) ということになる……だが人間精神は恣意的に発展するものではけっしてなく背後には神意があって、その神意が人間を導いている⁶⁾」のだと。つまりヴィーコはマルサスに2つの重要な教訓を与えている。第1は、歴史の発展過程は偶然のものでなく(必ず神の摂理に従うもので)、原因と結果の連関した1つの鎖をなしているものだということ。第2は、いろんな民族や人類の発展は、つねに同じ方向に向かって進むものだということ——この2つである。⁷⁾いい換えると "歴史発展は一定の法則に従う" (bestimmten Regeln unterworfen ist) ものだということ、また歴史学は数学と同じように "証明的な科学" (ebenso scharf erweisliche Wissenschaft) なのだ——ということである。⁸⁾だから数学と同じように公理(公準)を必要とする。★

★ ヴィーコはいう——「或る者は彷徨を止めて一定の場所に住みついた。そこで彼らは女たちと同棲したが、神の怖ろしさが身にしみていたので、その怒りを避けるために、婚姻の儀式を行って宗教的かつ愛欲的な肉体的結合を祝福し、こうして子供を生み、家族を構成するに至った……さらに家はこのような生成を通じて多くの家族となり、最初の〈氏族〉gentiが形成される」[13]「〈都市〉urbsはすべて最初耕された土地につくられ、長年の間、神への怖れを抱きながら宗教的森の中に引き籠り身を隠していた家族が抬頭してきたことを意味する」[16]「諸民族の世界すなわち文明社会をつくったものは人間なのだから、この"学"を究めることができるのは人間なのである」[331]「この諸民族の世界が人間によって創られたものであるならば、人間はいかなる点で常に一致してきたか、また今もなお一致しているかを、われわれは知ることができる」[332]「この永遠にして普遍的な原理は、あらゆる民族が生まれ存続する基盤となっているものであり、またあらゆる学問に妥当する原理でもある」[163]「ヴィーコ」(『世界の名著』前掲)と——原始社会の人間の発展を人口要因から説明している。

ヴィーコが「この"学"はまさしく幾何学と同じ進み方をする。幾何学が自分の原則(公理)の上に幾何学を構築し考究する」[348]ものとし

「この真実の根拠を探し出すことが、この "学" のもう 1 つの大きな努力目標」[150] であり「この学の最後の原理的観点は世界史の始原に関するものである」[399] と述べて、新しい歴史学には "公準"（または公理）が必要であることを提唱した——その提唱に従ってマルサスはまず 2 個の公準（postulata）を考えたものと思われる。しかもその場合「人間文明の最初のものが婚姻である」[11]，「人間文明の第 2 は埋葬である」[12] ——というヴィーコの『新しい学』に着目することによって、人口要因から原理（または公理）を設定する必要を感じとったに違いない。

それが『人口原理論』第 1 版第 1 章の以下の文章となる。「私は 2 個の公準（postulata）を置くことは正当に許されると考える。

第一 食物は人類の生存に必要であるということ。

第二 両性間の情欲は必要であって、大体いまのまま変わりがあるまいということ⁹⁾——こうして初版『人口原理論』の "公準" が導出されていく。

こうして、われわれはマルサスの "公準"（公理）つまり先験的真理の設定の手法がヴィーコの『新しい学』の影響のもとにあることを知りうる。ヴィーコはいう「いずれの民族も、何らかの宗教をもち、厳粛な結婚を交し、死者を埋葬する。どれほど未開野蛮の民族にあっても、この宗教、婚姻、埋葬の行為は、最高の趣向を凝らした儀式と神聖なまでの厳粛さをもってとり行われる。とすると "互いに没交渉の住民全体の中に生まれた共通観念は、真理について共通の要因をはらんでいるに違いない" という公理から、次のことがすべての民族についていえるはずである。すなわち、いずれの民族にあっても、人間文明はこの 3 つの習俗から始まったのである。そしてこの 3 つの習俗は、世界が再び野生のままの野蛮状態に退廃することのないように、あらゆる民族によって神聖なものとして守られたに違いない。以上の理由から、われわれは 3 つの永遠にして普遍的な習俗を、この "学" の最初の 3 原理とした¹⁰⁾」と。——してみると、ヴィーコ

は、宗教，出生，死亡の3つを原理として人間歴史が解明できるものとしていることは明らかである。このうち"出生"と"死亡"はいうまでもなく人口要因である。マルサスはこの人口要因から人間歴史の解明を企図したものであるということが出来る。さらにまた『人口原理論』が人口を"武器"として歴史解明を意図した歴史哲学の書物であることを理解しうる。

繰り返していうと，A] 歴史哲学（注．ヴィーコは歴史哲学の創始者）としては，まず"公準"の設定が必要なこと B] その原理から幾何学のように命題がつくられなければならない C] 歴史観としては客観的法則性を示す必要がある——という論法で記述する必要があるということを学びとった。この3要素のうちマルサスは"人口"の要因だけに注目して人間歴史の解明追求を意図していったのだと断言できる。

まず A] から考えてみると——「人間は食物なしで生きることができないということは天性の法則」（第4版付録，吉田秀夫訳 春秋社273ページ）とマルサスがいうように，これを原理（始源，第1のもの）とすることは容易に認められるところである。しかも人間実存の第1原理であるということはヴィーコのいうように"学"の第1原理だということになる（歴史を，その発生的・歴史的発展 its genetic or historical development としてみる限り——歴史を創ったものは人間であるなら——歴史は人類の発展の叙述となるべきものなのであるから）。しかもこの原理は，人口増加は必ず生存資料によって制限せられる——といい換えることができる（結局おなじ意味だから）。そしてこれは"天性の法則"のように，証明無用の原理だから，これを規制原理と呼ぶことにする。次に「両性間の情欲はあらゆる時代においてほとんど同一であるから代数の用語でいえば，与えられた量（a given quantity）と考えられよう」（第2版第13節 吉田秀夫訳 前掲313ページ）とマルサスが述べているように，われわれの实在が父母の情欲の結果であることでわかるように，これ（両性間の情欲）も原理（始源，第1のもの）と考えられよう。これを増殖原理と名付ける。そ

してこれらの原理から幾何学のように命題をつくることによって、マルサスの有名な3命題はおのずからでてくる。

その3命題とは――

- 1) 人口増加は必ず生存資料によって制限される。
- 2) 人口は有力かつ顕著な妨げによって阻止されない限り、生存資料の増加する時にはつねに増加する。
- 3) これらの妨げ、および人口を生活資料の水準に抑止する妨げは、道德的抑制、罪惡及び窮乏である。¹¹⁾

となって表現される。

C] の人口史観の観客的法則性の確立のためには、マルサスは "人口動態交替法則"（または人口波動法則）を用いている。★

★ "人口の波" は出生数から死亡数を引いた人口の自然増加が歴史的な波動をえがいて上下すること――したがってそこには人口の突進と停滞、ないし減退が時間の経過とともに生ずることをさしている。ある時期には人口の突進がおこったかと思うと、つぎの時期にはその停滞ないし減退があらわれる。それはちょうど経済が景気の上昇と下降との両局面を経過するのに似ている。人口は長きにわたって静止することなく、たえず波動をえがいて運動をつづけてきた……ある時代には高い出生率が高い死亡率、低い結婚率と結びつき、ある時代には低い出生率が低い死亡率、高い結婚率と結びつくといった仕方、独特の組合せが普及する。（南 亮三郎『人口思想史』 1-3 ページ）

増殖原理と規制原理は定立と反定立であり、この2原理のあいだには、対立や均衡や均衡破壊の相互関係があるから、人口運動としては、歴史の流れのなかで交錯によって波動がおこるのは当然であり、波動は人口と生存資料との均衡――均衡破壊――均衡回復という運動過程となって現れる。その場合、規制原理はつねに均衡化的に作用し、増殖原理はつねに均衡破壊的に作用する。しかも「人口がつねに経済的生活空間との関係において波動をあらわすものであるかぎり、人口の波には、さまざまな歴史的ある

いは社会経済的な諸原因の変動が結びついていなければならない¹²⁾ものであるから、その時代の人口様式からその時代の特徴を知ることができるわけである。いま "人口様式" を "その時代の特色的な人口要因の組合せ" を指すものとする。「人口様式はその時代の人口の全体としての繁殖態度——何ほどの人口増加をきたすか、それとも人口衰退をもたらすか——の〔その時代の〕態度様式¹³⁾」であるから、市民社会にしても、その解剖は、これを "人口" (人口様式) に求めることができることになる。いうまでもないことと思うが、子供を産むということ (産児) と子供を育てあげること (育児・扶養) は全く違うことである。産児は人間自然のパッションの結果であるが、育児・扶養ということは、社会・経済的関連で統一的にとらえて考えねばならない事柄である。ということは、その時代の繁殖事情 (あるいは人口事情) から、その時代の社会・経済事情が察知できるということでもある。

だからマルサスは「したがって、人類の歴史^{●●}を注意深く吟味するものは、これまで人間が生存し、あるいは現在も生存しているどの時代、どの国においても次のことを認めざるをえないのではなかろうか¹⁴⁾」——と書いて、前記の3命題が歴史的にみて、いつ、いかなる社会においても妥当するといいい切っているし、また "波動" については「この種の波動 Oscillationはおそらく普通の人の目にははっきり見えないであろう。そして、もっとも注意深い観察者にとっても、その期間を計算することは困難であろう。しかし、大多数の古い国々では、私の記述よりもはるかに不鮮明かつはるかに不規則ではあっても、この種のある変化が存在することを、この問題を深く考える思慮ある人ならば、だれも疑うことはできない¹⁵⁾」と述べ、「われわれの有する人類の歴史^{●●}は、一般に上流階級の歴史にすぎない。人類のうち、こうした逆転および進転の運動が起こっている部分の風俗習慣について、依拠するに足る報告をわれわれはあまり多く持っていないのである。1 国民および1時期に関するこの種の満足な歴史をもつため

には多くの観察者による絶えざる細心の注意が必要であり，それによって社会の下層階級の状態とそれに影響を与える諸原因についての地方的および一般的な観察がなされなければならない。そして，この問題について正確な推論を行うためにはそのような歴史家が数世紀にわたって続けて現れることが必要であろう。この部門の統計的知識は近年いくつかの国々で留意されるようになり，こうした研究「歴史研究」の進歩によって，われわれは人間社会の内部構造を一層はっきりと洞察できるようになることを期待してよい¹⁶⁾」と述べたのである。

してみると——マルサスは人口波動法則（2原理の定立と反定立→総合）を人間社会の歴史に適用して——人口波動の光によって人間社会の姿をみることができると確信していたと考えられよう。

だから，唯物史観を——唯物弁証法を人間社会の歴史に適用して，唯物弁証法の光によって人間社会の姿をみるものとし，さらに社会の発展を社会的存在つまり物質的生活，社会の経済構造の変化，生産力の発達から説明しようとするものであるとするなら——人口史観は人口波動法則を人間社会の歴史に適用した歴史観であるといえよう。つまり唯物史観では「この世界を奥の奥で統（す）べているもの」を「物的生産力」とするに反して，人口史観では「奥の奥で統（す）べているもの」を人口増殖とみる。人口増殖を——たとえ大小の波動はあるにせよ——神の秩序として認識する哲学思想を彼の人口理論の基底において，人間の繁殖態度の変遷，経過を「導きの糸」として歴史を解析しようと意図したものといえよう。

マルサスの歴史に対する哲学的省察はマルサスの歴史哲学（＝人口哲学）であるが，マルサスは決して人間の無限増殖を「善」とは考えなかった。「人間幸福の永久源泉とみられた両性間のパッションは，あまりに強力に人口増加に働きかけるとそれは人間社会の幸福を阻害する反対物と化する。」「人口があまりに急速に増加しないということは，人類の幸福にとり最も重要なことである。」しかしその前提たり根本動力たる性的パッ

ションを減殺してしまつては "自然の目的は明らかに失敗に帰するおそれがある。" それどころか、努力にむかう刺激を受け得んがためには、このパッションを "減退させないで保持" してゆかねばならない。そしてこのパッションの持続こそマルサスにあっては "人口増加への不断の努力" であり、しかも "この不断の努力はまた不断に社会の下層階級を困悪裡に陥れ、そして彼らの状態のいかなる永久的改善をも妨げる傾きがある" のである。まことにマルサスにあっては、善であるものが悪であり、しかもこの悪を根底から取り除こうとすればやがてまた善そのものが根底から破壊されることになる。いわばマルサスは "両性間のパッション" をめぐって善と悪との解き難き無限相克のすがたを人生に見た¹⁷⁾——わけである。★

★ すでにヴィーコは『新しい学』で、人間社会では "悪" (vices) が社会的 "善" (virtues) に転化する経緯を述べて、 "これらすべてのことは、神の摂理 (Divine Providence)、神の立法的理性 (Divine Legislative Intelligence) がはたらいていることを示している" と述べているが、マルサスもヴィーコの創唱した "個人的には否定的な価値が社会的には積極的な価値に転化する" という価値の弁証法的転換思想の反響がみられる。(A. Stern, p.57f.)

ここにマルサスが人口増加をめぐって無限彷徨の哲学思想を抱いていたことを知りうる。いい換えるとマルサスは人口のもつ明暗 (善と悪) 2つの面を相互関連において理解し、1つの理論として統一的に把握していたともいえる。ということは——人口は、"ただ養わねばならぬ厄介物" ではないということである。それどころか人口増加が停頓するような場合には、経済そのものも停頓してしまうのである。不断の人口増加は進歩の動源でもあり、経済発展の拡大努力へのテコ (槓杆) となるものなのである。人口が明暗 (善と悪) の2つの面をあわせ持っているものであるとすると、歴史上に現れた過剰人口と過少人口との交替的発現は、人口と経済との調和と破綻の状況をそのまま現しているものと考えられうる。それは、

人口そのもののもつ善悪2重の本質が時代を異にして別々の面で注目されたものと考えれば——人口問題から，その国の，その時代の歴史を解析することができるということになるからである。

ところで，ヴィーコの歴史学は，イギリス，フランス，ドイツの思想界に強い感動を与えたが，カントも半世紀以上も経ったあとではあるが，——アルフレッド・スターン（Alfred Stern）はいう——「人間は自分が創造したもののみを認識することができるというヴィーコの着想は，半世紀以上あとになってイマヌエル・カントによって確認された。しかしこの偉大なケーニヒスベルクの哲学者は，自然もこの認識可能なものの領域からまったくはずれているわけでは決してないということを示した。すなわちカントは，われわれの悟性（Verstand）がそのカテゴリーと純粋な直観形式（reine Anschauungsformen）によって，自然認識の対象をみずから構成するのであって，それゆえに，悟性はみずから構成した範囲内の対象を，当然，また認識するのだ，ということを証明したのである。この構成の彼方（かなた）に控えているもの——物自体——は，認識されえない，というのがカントの説となった¹⁸⁾」のだと。また「カントによれば，歴史は，"自然"（nature）または"摂理"（Providence）とよばれる形而上学的な力の隠れた計画（preestablished plan）の実施である。この力には"知恵"（wisdom）がそなわっている。そして，人間たちはこの賢明な自然が抱く意図を知らないけれども，彼らはそれを無意識に実現していく。ここまでのところでは，カントはヴィーコが素描していた道を辿っているわけであり，カントの歴史哲学が特有の性格を帯びるのは，この計画（ヴィーコの歴史理論）の内容によってなのである¹⁹⁾」と。

ゲーテ（Goethe 1749-1832）も「イタリア旅行（1786-7年）中にヴィーコへの関心を促されるにいたり，この哲学者のうちに天才の呼吸を感じとった²⁰⁾」そうである。すなわち1787年にゲーテはナポリの法律家フィランジェリ Filangieri から献本を受けて『新しい学』を読んで"天才の呼吸"（歴史的

世界の呼びかけ)を感じる。ローマ帝国の "勃興・発展・停滞・衰退・終焉" を現実のなかにみたからである。のちに戯曲『ファウスト』(Faust) のなかの有名な詩――

- A. いったい この世界を奥の奥で
続べているものは何か
それが知りたい
そこで働いているいっさいの力
いっさいの種子は何か
それが見たい

(『ファウスト』「悲劇第1部」「夜」より)

- B. 永遠に創り働く生成の力が
君たちのまわりに愛のやさしい垣をめぐらすがい
君たちは移ろう現象として漂っているものを
持続する思考でつなぎとめるがい

(『ファウスト』「天上の序曲」より)

のなかにヴィーコの『新しい学』(歴史哲学)に影響されて、歴史の起動因(推進力)を探ろうとしているゲーテの姿をみることができよう。「ゲーテがローマから帰って1年後にフランス大革命が勃発する。ゲーテはイタリアの植物園で、植物の原形とそれがさまざまに変形(態)していく姿をみて――内面にひそむ生の原理から推論されうる法則性を感じとる。つまり1つの植物のそれぞれの器官はある条件のもとでは1つの姿容をしているが、それは何千態にも多様化させる原型を保持しているものであるということ――したがって "同じ法則が人間の生にもあてはまる" (1787年, フォン・シュタインあての手紙) ものとすると, ここから, 歴史的人類の謎をと きうると信じるようになる。すなわちナポリで読んだヴィーコ(『新しい学』)からこの問題に接近していく必要²¹⁾を感じとったのである。

このようにヴィーコの『新しい学』は、カントやゲーテのみならずヘーゲルにも強い影響を与えた（マルクスやエンゲルスに与えた影響についてはすでに述べた）。ドイツでは1822年に『新しい学』の翻訳が出版され、ヘーゲル学派の急進家エドヴァルト・ガンス（Eduard Gans 1798-1839）は1837年にヴィーコをヘーゲルの先駆者の1人と認めている。★

★ ガンスはヘーゲルの『法哲学』や『歴史哲学講義』の出版で知られ、1729年にはベルリン大学法学の教授となって、法学の哲学的基礎をヘーゲル哲学体系に求めた。ガンスはヘーゲルの『歴史哲学講義』（Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte）第1版の序文（1837年6月8日ベルリン）で「18世紀の初めになってはじめてヴィーコ（Vico）によって……歴史の根底に、根源的な法則と理性の思想とをおこうという企てが始められた」（武市健人訳 岩波文庫（上）25ページ）と述べ「いま真に完成した歴史哲学を挙げるという段になると、精々ヴィーコ、ヘルダー、フリードリヒ・フォン・シュレーゲル、とヘーゲルこの4人が数えられるだけ」（同書29ページ）だ、という。

ヴィーコの歴史哲学がカントやヘーゲル、ゲーテやマルクス、エンゲルスらに与えた影響がよくわかる。歴史学の専門家であったマルサスがヴィーコの影響をうけて人間歴史の起動因を人口原理に求めていったものと断定して間違いはない。

Ⅱ 人口史観の構造

前節の「特色的な歴史の見方……それはおそらくマルクスやエンゲルスの歴史観と隣り合わせの、しかもそれとは全く異なった歴史観」という南亮三郎博士の記述のなかから——“唯物史観と隣り合わせ”で“しかもそれとは全く異なった歴史観”という言葉にわれわれはマルサス人口史観解明の1つの示唆を感じる。それで、ひとまず“唯物史観誕生の書”といわれる『ドイツ・イデオロギー』第1巻第1章の「唯物論的な見方と観念

論的な見方との対立」(*Feuerbach, Gegensatz von materialistischer und idealistischer Anschauung*)の「序論」(*Einleitung*)のA)の1 "歴史" (*Geschichte*)の章をふり返ってみて、その構造の面から、もういちど検討してみることにしよう。

(I)

順序を立てて述べていくと——もともとマルクスもエンゲルスも、ヘーゲルの影響をうけた観念論者であった。マルクスがベルリン大学に学んだのは、彼の18歳の時であって、ヘーゲルはすでに5年前の1831年に死んでいたが、当時のドイツの思想界の空は、このすでに没した太陽の余光に輝いていた時期であった。ところが1844年ないし45年以降、フォイエルバッハ(L. Feuerbach 1804-72)の影響をうけて唯物論者となってヘーゲルの観念論と決定的に訣別する。★

★ この辺の事情については、エンゲルスの有名な1文——「そのとき、フォイエルバッハの『キリスト教の本質』(*Das Wesen des Christentums*)が刊行された。この本は、唯物論(Materialismus)を単刀直入ふたたび王位につかせることによって、この矛盾を一撃のもとに粉碎した……呪縛(じゅばく)は解かれた。体系は爆破され、わきへ投げすてられた」(M. E. W. Bd.21. S.272.「ルードヴィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終焉」(『全集』第21巻 藤川 覚訳 276ページ)がよく示している。

マルクスがパリに来たのは1843年10月下旬であった。マルクスの『パリ時代』のもっとも重要な出来事はエンゲルスの来訪(第2回目の会合)であった。(エンゲルスは1844年8月28日頃から9月6日頃までパリに滞在)。こうして彼らの間には死ぬまで続く友情の絆が生まれたわけだが、両人は彼らの思想の完全な一致を確認するという意味をこめて、共著『神聖家族、別名、批判的批判の批判、ブルーノ・バウアーとその伴侶を駁す』(*Die heilige Familie, oder Kritik der kritischen Kritik. Gegen Bruno*

Bauer & Consorten, 1854) でバウアー兄弟との対決に乗り出した（バウアー 3 兄弟は安っぽい形而上学商品売り歩く貪欲な 3 人の行商人として描かれる）。いうまでもなく、この『神聖家族』は、ドイツ観念論哲学に対する清算を意図したもので『ドイツ・イデオロギー』で展開されることになる唯物史観への橋渡しの役割を果たすものであった。だが、しかし『神聖家族』では、フォイエルバッハとの対立を明確に意識するまでにいならず——それどころかフォイエルバッハの現実的人間主義を高く評価しているもので——この清算は、じっさいには『ドイツ・イデオロギー』、最近のドイツ哲学——その代表者フォイエルバッハ、B. バウアーおよびシュテルナーにおける——およびドイツ社会主義——そのさまざまな予言者たちにおける——の批判』（*Die deutsche Ideologie, Kritik der neuesten deutschen Philosophie in ihren Repräsentanten Feuerbach, B. Bauer und Stirner, und des deutschen Sozialismus in seinen verschiedenen Propheten*）（全部で 50 ボーゲンにおよぶ厚い 2 冊本）で果されることになったのである（以下たんに『ドイツ・イデオロギー』と呼ぶ）。この『ドイツ・イデオロギー』が未公刊のまま著述されたところはブリュッセルであった。さきにフランス政府は、プロイセン政府の唆誘をうけてマルクスを危険な革命家としてパリから追放したので、1845 年 2 月やむなくマルクスはベルギーのブリュッセルに移ることになった（ここに 3 ヶ年とどまる）。エンゲルスも 1845 年春ブリュッセルに移住してくる。そこでマルクスはエンゲルスと共同して、当時おこなわれていたいっさいの観念論的学説に対する闘争を継続しつつ唯物史観の仕上げに努力したのである。後年（1932 年）発見されて陽の目を見ることになった『ドイツ・イデオロギー』（この著作の最後の部分を書きあげられてから何と 85 年もたったのちになる）は 1845 年 11 月執筆にとりかかり 1846 年 4 月には終了していたものと推定されている。『ドイツ・イデオロギー』の第 1 章は 28 歳のマルクスと 26 歳のエンゲルスが、ヘーゲ尔的観念論的世界からの脱出という共通

目的を抱きながら、それまでのお互いに育（はぐ）くんできた思想をつき合わせるという作業の結果、書きあげていったものであった。しかし第1巻第1章の「フォイエルバッハ・唯物論的見方と観念論的見方の対立」の執筆者はエンゲルスで、思想的にもエンゲルスの方がリードしていたようである。★

★ 『ドイツ・イデオロギー』は、全体としては、マルクス、エンゲルスの2人にモーゼス・ヘス（真正社会主義者）およびヨーゼフ・ウィデマイヤー（社会主義にかぶれた砲兵将校）の4人の共同討議によるものであるが、あとの2人は唯物史観誕生にそれほど大きい役割を果たしていない。

唯物史観誕生の書といわれる『ドイツ・イデオロギー』をマルクスとエンゲルスが協力して創唱記述するにいたった経過は以上で明らかであろう。

（Ⅱ）

『ドイツ・イデオロギー』が唯物史観誕生の書であるということとその誕生までの経過を知りえたので、次に唯物史観の方法としての弁証法的唯物論について述べておこう。

マルクスやエンゲルスのいう唯物論はふつうにいわれている静的・非歴史的な存在論的唯物論ではなく——思惟にたいする存在の根源性を提唱していくものであるから——これまでの唯物論が機械論的・非歴史的であったのに対して、歴史的、発展的変革的なものなのである。というのはこれまでの素朴唯物論では事物の[・]変化が説明できないのである。静的観照では——たとえば、どうしてオタマジャクシが蛙になるのか、サナギが俄かに蝶になるのかわからないように——思弁哲学では、プロレタリアートという階級がなぜ発生してきたのか、どういう歴史的使命をもつものなのか——がわからない。社会変革という[・]変化が説明できない。だからマルクスは「これまでのあらゆる唯物論（フォイエルバッハをもふくめて）の主要

欠陥は、対象・現実・感性が、ただ客体の、または観照の形式のもとでのみとらえられて、感性的人間的な活動、実践（*sinnlich menschliche Tätigkeit, Praxis*）として、主体的にとらえられていないことである。それゆえ能動的側面（*die tätige Seite*）は、唯物論に対立して抽象的に観念論——これはもちろん現実的な感性的な活動をそのようなものとしては知らない——によって展開された。フォイエルバッハは感性的な——思惟客体（*Gedankenobjekten*）とは現実的に区分された——客体を欲するが、しかし、彼は人間的活動そのものを対象的活動（*gegenständliche Tätigkeit*）としてはとらえない。だから彼は『キリスト教の本質』において、ただ観想的態度（*das theoretische Verhalten*）のみを真に人間的な態度とみなし、それに対して、他方、実践はただそのきたならしいユダヤ人的な現象形態においてのみとらえられ固定される。したがって彼は“革命的な” “実践的に批判的な” 活動の意義を理解しない²²⁾」のだと書き、また「哲学者たちは世界をたださまざまに解釈してきただけである。肝心なのはそれを変えることである²³⁾」とも書いて、これまでの思弁的（静的）唯物論を批判したのである。つまり『ドイツ・イデオロギー』は従来の唯物論と彼らの新しい唯物論（弁証法的唯物論）との区別を明確にするとともに、彼らの哲学的意識の清算を示したものであり、フォイエルバッハには“活動的原理”（*das energische Prinzip*）が欠落していることを示したものであった。この弁証法的唯物論を人間の社会生活（人間社会とその歴史）へ適用したものが唯物史観なのであるが、『ドイツ・イデオロギー』で誕生した唯物史観は、その後『哲学の貧困、プルドンの“貧困の哲学”への返答』（*Misère de la philosophie. Réponse à la philosophie de la misère de M. Proudhon*. 1847）や『賃労働と資本』（*Lohnarbeit und Kapital*）（これは1849年4月4日号以降『新ライン新聞』の連載社説となったもので、そのもとになったのは、マルクスが1847年にブリュッセルのドイツ人労働者協会でおこなった講義である。）でいっそう明確化され——断片的であろ

うが説明を与えられ、『経済学批判』（Zur kritik der Politischen Ökonomie, 1859）の「序言」（Vorwort）で定式化されるにいたったものである。★

★ マルクスは『哲学の貧困』（Das Elend der Philosophie）の第2考察（Zweite Bemerkung）においていう——「社会的諸関係（die sozialen Verhältnisse）は生産諸力（Produktivekräften）に密接に結びついている。あらたな生産諸力を獲得することによって、人間は彼らの生産様式（Produktionsweise）を変える。そしてまた生産様式を、彼らの生活の資（Lebensunterhalt）を獲得する仕方を変えることによって、彼らは彼らのあらゆる社会的関係を変える。手回し挽臼（die Handmühle）は諸君に、封建領主を支配者とする社会を与え、蒸気挽臼（Dampfmühle）は諸君に、産業資本家を支配者とする社会を与えるであろう」（M. E. W. Bd.4. Das Elend der Philosophie, S.150.『全集』第3巻「哲学の貧困」133-4ページ）。また『賃労働と資本』（Lohnarbeit und Kapital）では「もちろん、生産者がたがいに結ぶこれらの社会関係、彼らがその活動を交換し、生産の行為全体に参加する諸条件は、生産手段の性格のいかに応じて、違ったものとなるであろう。火器（Feuergewehr）というひとつの新兵器が発明されるとともに、必然的に、軍隊の内部組織全体が変化し、諸個人がひとつの軍隊を形づくって軍隊として作用しうる諸関係が変わり、種々の軍隊の相互関係もまた変化した。

それゆえ、諸個人がそのなかで生産する社会関係、すなわち社会的生産関係（die gesellschaftlichen Verhältnisse）は、物質的生産手段、生産力が変化し発展するにつれて、変化し変化する全体としての生産関係（die Produktionsverhältnisse in ihrer Gesamtheit）は、社会的関係、社会（die Gesellschaft）と呼ばれるものを、しかも一定の歴史的発展段階にある（auf bestimmter geschichtlicher Entwicklungsstufe）社会、独特で特色のある性格をもった社会を形づくる。古代社会（die antike Gesellschaft）、封建社会（die feudale Gesellschaft）、ブルジョア社会（die bürgerliche Gesellschaft）はそういう生産関係の全体であり、同時にそれぞれ人類史上の特別の発展段階（eine besondere Entwicklungsstufe in der Geschichte der Menschheit）をあらわしている」

（M. E. W. Bd.6. Lohnarbeit und Kapital, S.407-8.『全集』第6巻「賃労働と資本」403ページ、傍点原著者）。また『経済学批判』（Zur Kritik der Politischen Ökonomie）の「序言」では——「私にとって明らかとなった、そしてひとたび自分のものになってからは私の研究にとって導きの糸（Leitfaden）として役だった一般的結論は次のように定式化することができる。人間は彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸

関係に、すなわち彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産関係（Produktionsverhältnisse）にはいる。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造（die Ökonomische Struktur）を形成する。これが実在的土台であり、その上に1つの法律的小および政治的小上部構造がそびえ立ち、そしてそれに一定の社会的諸意識形態（bestimmte gesellschaftliche Bewusstseinformen）が対応する。物質的生活の生産様式が社会的、政治的小および精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのである（M. E. W. Bd.13. Zur Kritik der Politischen Ökonomie, S.8.『全集』第13卷「経済学批判・序言」 6 ページ）——と。

つまり唯物史観とは弁証法的唯物論を方法とした歴史理論であり歴史哲学である。1つの時代がどうして次の時代に移行するものなのか——という変化の理論的理解がないと時代の発展を正しく叙述することができないし、またもし社会がどうして成立し、どうして衰退するかの理論的理解がないと、その社会の成立・発展・衰退を説明することができない。弁証法的唯物論なら、これらの変化の理論的理解が可能なのである。つまり社会発展を弁証法的唯物論から解明しようとした歴史観が唯物史観であり、そして唯物史観の課題は、社会発展の法則とは何か、社会構成の決定的な要因（究極の動因）は何か、この要因に対して社会構成の他の諸要因がどんな関係に立つかを明らかにすることが課題となる。

ところで、弁証法とは——一言で要約していうと「自然、人間社会および思考の一般的な運動＝発展法則にかんする科学」（エンゲルス²⁴⁾）である。それはすべての事物を対立物の統一として——矛盾するものの統一として——把握する。矛盾を運動の原動力とするということは、いっさいの運動が、その原動力としての矛盾の展開として発展することを意味する。しかも発展は、すでに通過した段階を、もういちどより高い次元で経過することによって可能（否定の否定）となるのであるから、その発展は直線的ではなく、いわば螺旋状に進行するものとしてとらえる。しかも弁証法はまた“漸進性の中断”であるから、——量から質への転化を伴うから——飛

躍によって革命的な変化が説明できる。だからあらゆる現象は「いつもそれ以前の変化の結果であるのみならず、それ自体のうちに将来の変化の萌芽をも宿している。それはいかなる段階にも、けっしてとどまらない。到達された均衡は新しい闘争によって攪乱され、この闘争はヨリ高い調和に、ヨリ高い綜合に、そしてヨリ高い段階におけるいっそう進んだ2分法(dichotomy)にみちびく。こうして、あらゆる発展の源泉は対立物のあいだの闘争²⁵⁾」となるものなのだ、といえる。いい換えると「弁証法とは、事物開発のリズム(the rhythm of the development of things)であり、事物が発展する場合の内的法則(the inner law)²⁶⁾」ともいうべきものであるから後驗的(a posteriori)に確認される。★

★ 断っておくが——唯物論と弁証法を単にプラスすることで弁証法的唯物論ができるわけでは決してない。唯物論を徹底させると必然的に弁証法となり、弁証法を徹底させると、どうしても唯物論になってしまう。エンゲルスは「運動は物質の存在の仕方である。運動のない物質は、かつて、どこにもなかったし、またありえない」「運動のない物質が考えられないのは、物質のない運動が考えられないのと同じである」(M. E. W. Bd.20. S.55.『全集』第20巻「反デューリング論」第1編「哲学」61ページ)と述べているが——運動を正しく理解することによって弁証法の十全の理解が可能となる。物質が運動であるとする——つまり、自己運動するものとする——あらゆる事物はみずからのなかに他(矛盾するもの)をもっているということであるから、存在とはあるものと他(矛盾)のものととの統一であるということであり、一般に“もの”とは、対立物の統一と考えられよう。対立物の統一、矛盾が運動とともに弁証法論理の根本契機をなす。

エンゲルスは数学の例を用いて弁証法を巧みに説明している。「代数学において、われわれがaを否定すれば-aをうる。さらにこれを否定するならば——否定の否定をおこなうならば a^2 をうる(つまりヨリ高次の綜合としてaも-aもあわせ含んだ、しかもヨリ高次の段階の綜合をうる。(M. E. W. Bd. 20. S.127.『全集』第20巻「反デューリング論」邦訳 142ページ)と。

(Ⅲ)

ここで唯物史観における“人間歴史の第1前提”としての“生の生産お

よび再生産" について，マルクスおよびエンゲルスの所説をもういちど検討し，彼らの前提に誤りがなかったかどうかを再吟味し，若き兩人が惜しむべき "見落し" をしている点について述べる。

マルクスとエンゲルスは『ドイツ・イデオロギー』の第1巻のA「イデオロギー一般，とくにドイツ・イデオロギー」（A. *Die Ideologie überhaupt, namentlich die deutsche*）で「あらゆる人間歴史の第1の前提はいうまでもなく²⁷⁾生きた人間的諸関係の現存（die Existenz lebendiger menschlicher Individuen）」であるから「人間自身は彼らの生活手段を生産しはじめるやいなや動物とは別なものになりはじめる……この生産は人口の増加とともにやっと始まる。人口の増加はそれはそれでまた諸個人相互間の交通を前提とする²⁸⁾」と述べ，[I]「歴史」（*Geschichte*）では「われわれはあらゆる人間的存在の，したがってまたあらゆる歴史の，第1の前提，すなわち人間たちは "歴史をつくり" うるために生きることができねばならないという前提を確認することから始めねばならない²⁹⁾」と前提し，「さて労働における自己の生の生産にしても，生殖における他人の生産にしても，およそ生の生産なるものは，とりもなおさず或る二重の関係として（*als ein doppeltes Verhältnis*）—— 一面では自然的関係として，他面では社会的関係として——現れる³⁰⁾」と書いている。つまり "生の生産" には二重の側面があって1つは自然的関係（*natürliches Verhältnis*）で，もう1つは社会的関係（*gesellschaftliches Verhältnis*）であること，人間歴史の第1の前提は "生の生産" であるから，この2つの側面から人間歴史をみていこうということであった。この場合，"生殖における他人の生の生産" が種の繁殖（人口増殖）を意味することはいうまでもない。

だから彼らは，人間歴史の最初の事実として「したがって最初の確認されるはずの事実（Der erste zu konstatierende Tatbestand）はこれらの個体の身体的組織（die körperliche Organization）とそこから当然出てくるこれらの個体と爾余の自然との間柄（あいだがら）³¹⁾」ということになる

と述べ「生活手段の生産は人間の身体的組織のせいでどうしてもとらざるをえぬ1つの措置 (ein Schritt) なのである。人間は彼らの生活手段を生産することによって、間接に彼らの物質的生活そのものを生産する^{3 2)}」と確言する。もう一度確認すると—— "あらゆる人間歴史の第1の前提は、いうまでもなく生きた人間的諸個体の現存" であり "人間が生きるためには、まず食い、飲み、住い、着ることなどが第1)に必要である。第2)に、人間たちの種の繁殖 (人口増加) が必要である。もし、このことをなしえないとすれば、人間は《歴史を作る》ことはできない" ——ということであるが、この前提は疑いなく正しい。

しかし誰しも気付いたように——ここでは人間歴史の前提として、第1)と第2)の計2つをあげていることは明白である。つまり、イ)「人間の最初の歴史的行為は——衣・食・住の必要充足のための諸手段の産出、物質的生活そのもの (materielles Leben selbst) の生産」ともう1つ。そもそものはじめから歴史的発展へはいりこんでくるロ)「人間たちが他の人間たちをつくり繁殖しはじめるということ」——の2つから成っている。エンゲルスはマルクス死の翌年 (1884年) でも「唯物論的な見解によれば、歴史を究極において規定する要因は[・][・][・][・][・][・][・][・][・]直接の生命の生産と再生産 (die Produktion und Reproduktion des unmittelbaren Lebens) とである。しかし、これはそれ自体さらに2種類のものから (doppelter Art) なっている。一方では、生活資料の生産 (die Erzeugung von Lebensmitteln), すなわち衣食住の諸対象とそれに必要な道具との生産。他方では、人間そのものの生産 (die Erzeugung von Menschen selbst), すなわち種の繁殖がそれである。ある特定の歴史的時代に、ある特定の^{くに}国の人間がそのもとで生活をいとなむ社会的諸制度は[・][・][・][・][・][・][・][・][・]2種類の生産によって、すなわち、一方では労働の、他方では家族の発展段階によって制約される^{3 3)}」と述べて、要するに歴史を究極において決定するものは、このイ)とロ)の2つだと述べている。

ところが、『ドイツ・イデオロギー』では、マルクスとエンゲルスは、イ) "物質的生活そのものの生産" とロ) "種の繁殖" (人口増殖) を、前記のように—— "二重にして1つの関係" (ein doppeltes Verhältnis) と断定してしまっている。前記のイ)とロ)が1つの関係としてとらえられてしまっている。だから「したがって、ある特定の生産様式 (Produktionsweise) または工業的段階 (industrielle Stufe) はつねに、ある特定の協働様式 (Weise des Zusammenwirkens) と結びついているということ——そしてこの協働様式は、それ自体、1つの "生産力" (Produktivkraft) である [から] ——人間たちの利用しうる生産力の総体は社会的状態を条件づけ、したがって "人類の歴史" は、つねに工業および交換の歴史とのつながりのなかで研究され論じられねばならぬということになる³⁴⁾」と述べて人間歴史発展の究極の起動因を "物的生産力" 1つに切り替えてしまっている。(人間歴史の動因はイ)とロ)の2つであった。いつの間にかロ)を切り捨ててしまっている点に注意)。

そうすると、果してイ)生活資料の生産とロ)種の繁殖を "二重にして1つの関係" (ein doppeltes Verhältnis) と断定した点に、彼らの若気の過ちがあったのではないかが問題になる。この点について、すでにクローウが「有用品の生産 (die Erzeugung von Gebrauchsgegenständen) は人間の生産 (人口増殖) と何の関係もない。消耗品をつくり出す (die Herstellung von Konsumartikeln) 行為は、生殖行為 (Zeugungsakt) や出産行為 (Geburtsakt) と何ら関係がない。生活資料生産の発展 (Entwicklung der Lebensmittelproduktion) に対応する人間生産の発展 (eine Entwicklung der Menschenproduktion) などありえない³⁵⁾」と述べて、イ)とロ)は2重ではあるが必ずしも同一の関係ではないと述べているのは鋭い着眼であった。ここで、若きマルクスとエンゲルスが唯物史観形成において "生活資料生産" と "人間の生産" を同一視することによって——逆にいうと、"種の繁殖" (人口増殖) が隠れてしまっていることになる。考

えてみると、ここで2つの史観が形成されていいはずであった。1つは"社会的生産力"を歴史発展の起動因とする唯物史観であり、もう1つは"人口"を基軸とする人口史観である。この2つの史観が"隣り合わせのしかもまったく異なった歴史観"であることは、あらためていうまでもないことである。

もう1つ。若きマルクスとエンゲルスが唯物史観形成にあたって犯した若気の過ちは、唯物史観が歴史発展の起動因を"生産力"としたことである。これは明らかに"歴史哲学"としてのカントの戒めに背くもので、唯物史観を歴史哲学としてみる場合、必ず問題になろう。マルクス学説がカント哲学を継承したことを誇りとするなら、人間歴史の究極的動因を決定する場合のこの背反は重大なミス（若気のせいとはいえ）として許されないからである。カントは『人間歴史の臆測的起源』（1786年）（Mutmasslicher Anfang der Menschengeschichte, 1786）において「もし人が臆測に耽溺（たんでき）したくないとすれば（Will man nicht in Mutmassung schwärmen），歴史の起源は先行する自然的諸原因（Naturursachen）から人間理性（menschliche Vernunft）によって導出することの不可能であるものから始めなくてはならぬ³⁶⁾」ものであって「本能（Instinkt），すべての動物の聴従するこの神の³⁷⁾声（diese Stimme Gottes），最初はただこれだけが新参者（Neuling）の人間を指導³⁷⁾したものであり，しかも「本能はこの新参者に若干の物を食糧として許し（味覚，嗅覚，視覚などによって），他の或る物を彼らに禁止した³⁸⁾」ことによって個体を保持することができた。「自然は生活の糧に対する本能によって各個体を保存するものであるが，この本能に次いで最も優先するものは性に対する本能（Instinkt zum Geschlecht）であり，これによって自然は各種族の保存を配慮³⁹⁾したものであるとハッキリいい切っている。わかり易くいうと，人間歴史の究極的動因を"生産力"のような理性的なものから導出すべきではなく——本能（まず食に対する本能ついで性に対する本能のような第1次的なもの）す

なわち "神の声" に求めなければならぬ——と明言していることである。端的にいうと，人間歴史の究極的前提は人間そのものの実存であるから，人間歴史の推進力は "神の声" たる人間本能に求むべし——と教えている。ところがマルクスやエンゲルスは，このカントの教訓に反して "生産力" のような第2次的な人間理性によるものから導出している。ここに若きマルクスとエンゲルスの見落としがあった。

ところが1805年暮（39歳時）東印度大学教授に就任し近代史や経済学を担当したマルサスにとっては，種の繁殖（人口増殖）を見落すような軽率さがあろうはずもなく，"種の繁殖"（両性間の本能にもとづく）を歴史発展の推進力とする人口史観を構想していたに違いない。★

★ ここで，唯物史観の "生産力" という概念（語義）について付言しておきたい。唯物史観における "生産力" や "生産関係" の語義については，マルクスもエンゲルスも何ら具体的な系統的な解説がない。したがってマルクスのいう "生産力" とは何かということについては，従来しばしば論争が続けられてきた。ここでは "生産力" という言葉の意味を3つの要因からなるものと規定しておく。「1)自然的諸条件，2)もろもろの技術，3)社会的労働の組織と分割（分業）がそれである。この分析から始めなければ1つの社会の構造，その社会を構成する諸個人の配分，彼らの相互の状態を理解することができないことは明らかである。この3つの要素はマルクス主義が一定の社会的生産力とよぶものを構成する」（H. Lefebvre, *Le Marxisme*, Presses Universitaires de France, 1980. p.64. ルフェーブル『マルクス主義』竹内良知訳 クセジュ文庫，白水社76ページ）と規定する。社会的生産力を1)2)3)の総合と考えたからこそ「ヘーゲルを基礎として出発したマルクスはプロレタリア階級というものの歴史的使命を認め，そのプロレタリア階級が何によって操られているか。それはすなわち生産力であるとした。つまり生産力はヘーゲル哲学におけるイデー，理性に相当するものである」（小泉信三「唯物史観と社会思想」『全集』第4巻文芸春秋社362ページ）と規定しておく。その場合「人間が入り込んでいって互にとり結ぶ関係が生産関係」である。つまり，社会の存続のための物質はめいめい個別につくられるものでなく，社会的に生産される。この生産の機能において各人は一定の関係に立つ。この関係が生産関係である。

(IV)

さて、ここでわれわれは人口史観の構造について述べるべき地平に辿りついた。

ある時代の社会の繁殖態度（人口要因の組合せ）はいつも一定のパターンをとるものである。逆にいうと人口様式（その時代の特色的な人口要因の組合せ）からその時代を知ることができる。なぜならば——マッケンロートのいうように——「人口過程は1つの生活過程」（Der Bevölkerungsvorgang ist ein Lebensvorgang）であるから「繁殖態度（das generative Verhalten）は歴史的・社会的人口様式（Bevölkerungsweise）にいたる」ものであって「1つの人口様式は、それゆえに1つの意味関連であって、その関連のなかでは繁殖態度のすべての要素が有意義な仕方（in sinnvoller Weise）で互いに調和するものなのである。つまり家族制度（Familienverfassung）、結婚率（Heiratshäufigkeit）、出生力（Fruchtbarkeit）などがそれであって、すべてこれらの個々の“行動パターン”（patterns of behavior）が合わさって調和を保ちつつ、相互に1つの構造をつくりあげる。〔これが人口様式であるから〕人口様式と繁殖構造（generative Struktur）とは同義語⁴⁰⁾となるからである。だから、その時代の人口様式（または繁殖構造）がどうなっているかを知れば、その時代の歴史的事情（段階）がわかるということになる。いい換えれば「われわれはこんにち1つの人口様式……まったく特定の歴史的地点に位置している⁴¹⁾」ということになる。

具体的にフィリップ・M・ハウザー（Philip. M. Hauser）は、基礎的人口特性（basic population characteristics）（つまり年齢構造、従属人口指数、平均余命、出生率、子孫生存の諸指数の組合せ人口様式）から人間歴史を下記の5段階に区分している。

- 1) 原始的静止段階
- 2) 前近代人口段階
- 3) 過渡的人口段階

4) 近代人口段階

5) 近代的静止段階

——以上の5段階である。

下表1は人口特性からみた時代区分を表示したものであるが——第1)の原始的静止段階 (the primitive stationary) は "高い出生率" と "高い死亡率" の結果——ゼロ人口増加の時代である。第2)の前近代人口 (the premodern stationary) の段階では死亡率低下が出生率低下より大きいため年当り1%くらいの安定した増加率となる時期。第3)の過渡的人口 (the transitional population) の段階では、死亡率低下は大幅となるが出生率が幾分増加したため、この時期は女子の出産可能年齢 (child bearing years) の増大と健康の改善のため——出生率が高まっている時期。第4)の近代人口 (modern population) の段階では出生率の著るしい低下と死亡率の持続的低下が合わさって年増加率が1%に留まっている時期。第5)の近代的静止 (the modern stationary) の段階は現代の一部の先進国で実際に

表1 異なった出生率と死亡率水準の下におけるモデル人口断面図

| 人口特性 | 原始的静止* | 前近代† | 過渡期≠ | 近代§ | 近代静止 |
|-------------|--------|------|------|------|------|
| 出生率 | 50.0 | 43.7 | 45.7 | 20.4 | 12.9 |
| 死亡率 | 50.0 | 33.7 | 15.7 | 10.4 | 12.9 |
| 年増加率(%) | 0.0 | 1.0 | 3.0 | 1.0 | 0.0 |
| 年齢構造 | | | | | |
| 15歳未満(%) | 36.2 | 37.8 | 45.4 | 27.2 | 19.2 |
| 15～64歳(%) | 60.9 | 58.8 | 52.0 | 62.4 | 62.3 |
| 65歳以上(%) | 2.9 | 3.4 | 2.6 | 10.3 | 18.5 |
| 平均年齢 | 25.5 | 25.1 | 21.8 | 32.8 | 40.0 |
| 従属人口指数、総数 | 64 | 70 | 92 | 60 | 61 |
| 年少人口(15歳未満) | 59 | 64 | 87 | 44 | 31 |
| 老年人口(65歳以上) | 5 | 6 | 5 | 16 | 30 |
| 15歳まで生存率(%) | 41.0 | 55.9 | 78.8 | 95.6 | 98.9 |
| 平均寿命(年数) | 20.0 | 30.0 | 50.0 | 70.0 | 77.5 |
| 50歳まで生存する女子 | 6.2 | 5.5 | 6.1 | 2.9 | 2.7 |
| 1人当たり平均出生児数 | | | | | |
| 20歳まで生存する | 2.3 | 2.9 | 4.7 | 2.7 | 2.0 |
| 平均子供数 | | | | | |

* 死亡水準 1(水準の定義については資料参照)

† 死亡水準 5

≠ 死亡水準 13

§ 死亡水準 21

|| 死亡水準 24

(出所) P. M. Hauser, World Population.

現出している状況で——低い出生率と低い死亡率の組合わせからなる。⁴²⁾
——という歴史的時代区分が可能であるという。

また、フランスのフィリップ・ムウシェ（Philippe Mouchez）も人口様式から時代区分をおこなっている。岡田 実教授の邦訳によるとムウシェは右図1のごとく

- a) 自然人口体制
- b) 第1段階
- c) 第2段階
- d) 第3段階

の4段階に歴史を区分し以下のように解説する。すなわち「出生率も死亡率も人口1,000人当り40前後という高い自然動態での人口成長様

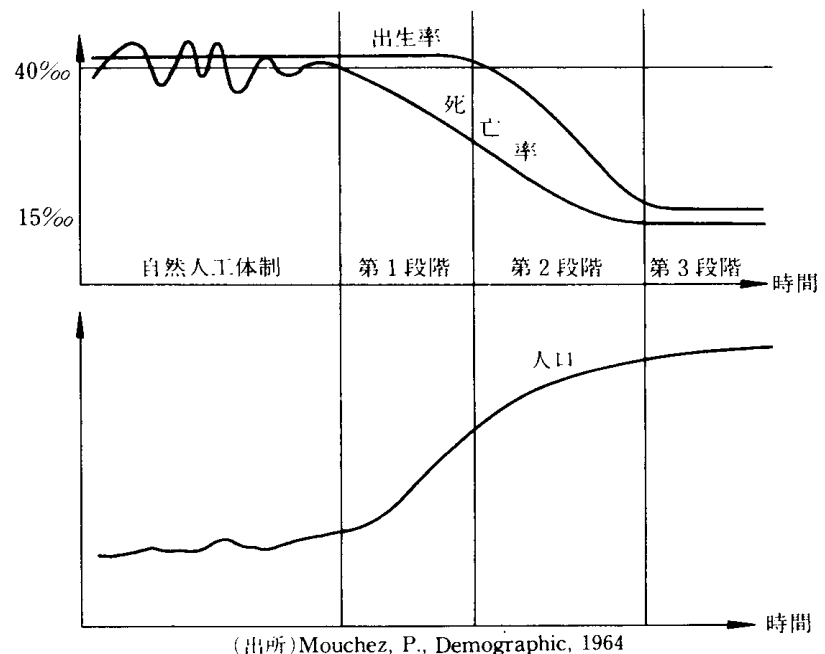


図1 出生率、死亡率、総人口の発展

式の段階を自然人口体制とよび、出生率は高く維持されているが、死亡率が次第に下っている局面を第1段階とする。次に死亡率はさらに低下するが、出生率ももっと急速に低下する局面を第2段階、そして出生率も死亡率も低位で安定する局面を第3段階と名付ける。総人口は第1段階と第2段階では、出生率と死亡率の差が大きくなるため、急激な増大を示す。出生率も死亡率もともに低い人口の低位均衡への転換を人口転換と呼んでいるが、これは近代ヨーロッパ諸国（わが国でも1947-9年のベビー・ブームを契機として人口転換をむかえた）で歴史上、世界で最初に経験されたものである⁴³⁾と。

なお岡田教授はヨリ簡潔に図2のような「人口様式発展の模型図」を示して以下のようにいう。

「第Ⅰ段階は多産多死の人口様式をもち、経済社会の発展段階からすれば、チポラの農業社会、ロストフ（W. W. Rostow）のいう伝統的社会に属する。第Ⅱ段階は、出生率は不変で死亡率だけが下降する段階で17世紀末から19世紀前半の西欧の農業革命、産業革命の時期である。第Ⅲ段階は、西欧の19世紀末から20世紀30年代の人口様式で、死亡率の低下よりももっと急速な出生率低下で特徴づけられている。第Ⅳ段階が1940年代以降の現代である⁴⁴⁾」と。

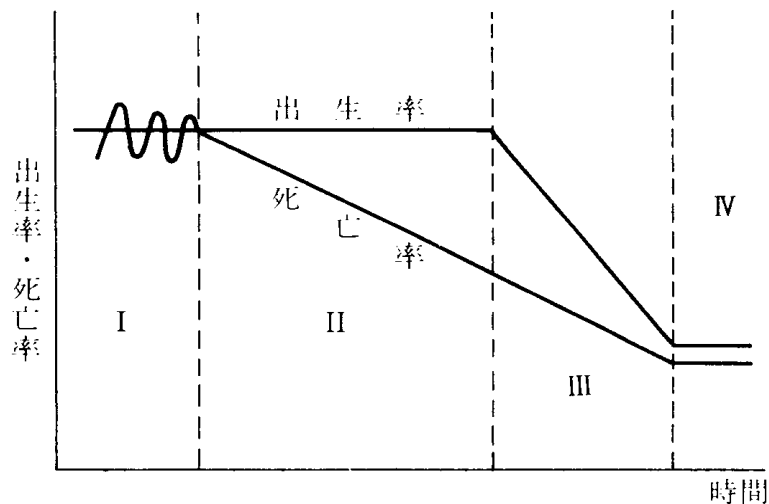


図2 人口様式発展の模型図

またブラッカー（C. P. Blacker）は『人口成長における諸段階』（Stages in Population Growth）（1947）において、人間歴史を人口成長の面から次の5段階に区分している。

1) 高静止（the high stationary）

その特徴は高出生率と高死亡率

2) 早期膨脹（the early expanding）

出生率も死亡率も高いが、その死亡率は低下をはじめる。

3) 後期膨脹（the late expanding）

出生率低下が始まるが、前から始まっていた死亡率の低下はもっと急速になる。

4) 低静止 (the low stationary)

出生率も死亡率も低い。しかし両者がバランスを保つ。

5) 減退 (the declining)

死亡率は低い。が出生率はさらに低い。ゆえに出生数以上の死亡数の超過がおこる。

以上の 5 段階に人間歴史を区分することが可能である⁴⁵⁾という。

さらにまたフランスのランドリー (Adolphe Landry) は1934年の『人口革命』(La Révolution Démographique) では人間歴史を下記の 3 段階に区分した。(ただしランドリーは段階といわず人口体制と呼んでいる)。

1) 原始体制 (régime primitif)

2) 中間体制 (régime intermédiaire)

3) 現代体制 (régime contemporain)

の 3 段階である⁴⁶⁾。

この他にも、人口様式からみた人間歴史の段階区分があるが——要は、“人口” からの歴史解明ができるということ、したがって “人口” を動因とする歴史観が十分、成り立つことを知りうる。

さて問題は、この史観の理論的裏づけである。

このような “人口” による歴史解釈の提唱はすでに、歴史哲学として、カントによって説かれている。カントは歴史的なるものを示す 2 つの言葉、ヒストリー-Historie (史的記述、単なる過去を表示する) とゲシシテ-Geschichte (哲学的歴史、未来および過去を表示する) をハッキリ峻別している。カントは学的歴史 (ゲシシテ) を “1 観点から探求しうるような事柄についての思想” (『世界市民的意図における普遍史のための理念』) と規定している——「たとえば結婚とこれに由来する出生と死亡は、人間の自由意志がこれらの事象に非常に大きな影響を及ぼしているから、これらの数値 (Zahl) を予め計算によって規定しうるような規則には全く従っていないように見えるけれども、しかし諸大国で示される年々の統計表

（die jährlichen Tafeln）はこれらの事象も一定不変の自然法則に従って（nach beständigen Naturgesetzen）生起することを実証している⁴⁷⁾」のをもてもわかるとおり「意志の現象であるところの人間の諸行為は、その他のあらゆる自然の出来事と同様に普遍的自然法則によって規定せられている⁴⁸⁾」ものであって「個々の主体においては錯綜して無規則的であるように見える現象も人類全体において見れば人類の根源的素質（ursprüngliche Anlage）の、たとえ緩慢であっても前進してゆく発展として認識せられうる⁴⁹⁾」ものなのである。人間はこの自然の意図を“導きの糸”として気付かないでいるだけなのだから、せめて「哲学者にとっては……人間的事物の不合理な進行のうちに自然の意図を発見しえないかどうか、そのような意図からして自然の特定の計画に従って1つの歴史が可能であるのではあるまいかを調べてみるほかに方策はない⁵⁰⁾」と述べ、さらに「自然がすべての自然素質の発展を成就するために利用する手段は、それら素質の社会における対抗関係（Antagonism）である⁵¹⁾」と述べ、帰結として「人類の歴史は……自然の隠されたる計画の遂行（die Vollziehung einer verborgenen Plans der Natur）⁵²⁾」なのだとする。

しかもその歴史の起源は「種族を繁殖させるための夫婦であり」「すべての人間がそこから派生することになる家族（die Familie, woraus alle Menschen abstammen sollten）という単位⁵³⁾」から発すると明言しているのをもても、“種の繁殖”（人口増加）を根源とする歴史哲学は十分、理論的基礎をもつ。それは“人類の根源的素質の発展”を示すものであり、“自然の意図”の哲学的描写なのである。つまり人口史観は歴史哲学としてカント的裏付けをもつものなのである。

（Ⅴ）

残された問題は、唯物史観と人口史観のどちらが——史観として、その適用範囲においてすぐれた史観であるかという比較の問題である。

すでに述べたように唯物史観はマルクスとエンゲルスという若き天才によって創唱されたものであって多くの真理をふくみ史学上また社会学上すこぶる貴重な歴史観である。

しかしまた唯物史観に関しては、こんにちまで多くの批判がなされてきたことも事実である。しかしここでは、唯物史観そのものの批判ではなく、史観としての適否のみを——人口史観と対比して——とりあげる。いま唯物史観を一言で要約すれば——「唯物史観とは、いっさいの歴史的事象の決定原因をば経済的基礎の姿容に求むるものであって、物質的生活の生産方法は社会的・政治的ならびに精神的生活行程一般を規定するという『経済学批判』の序言の一節は刻明にその根本的見解を示す⁵⁴⁾」ものであるといえよう。生産力の発展がかつて封建制度を崩壊せしめたように、いままたそれは資本主義の存続をも不可能にさせることによって、必然的に社会主義を到来させると主張する。のみならず社会主義到来の根拠を倫理的理想でなしに、社会的発展の理論として提唱する点で特徴のある歴史観である。『経済学批判』（1859年）の序言で説いている段階理論では、人間歴史を1)アジア的 2)古代的 3)封建的および4)近代ブルジョア的と区分していることは周知のとおりである。★

★ マルクスはいふ——「大づかみにいって (In grossen Umrissen), アジア的 (asiatische), 古代的 (antike), 封建的 (feudale), および近代ブルジョア的 (modern bürgerliche) 生産様式が経済的社会構成のあいつぐ諸時期として表示されう。ブルジョア的生産諸関係 (die bürgerlichen Produktionverhältnisse) は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である」(M. E. W. Bd.13. Zur Kritik der Politischen Ökonomie, Vorwort. S.9.『全集』第13巻「経済学批判・序言」6ページ) と。因みにレートロー (Götz Redlow) 他は『弁証法的・史的唯物論』(Einführung in den dialektischen und historischen Materialismus) で、唯物史観の時代区分は要するに 1)原始社会 (社会の生産諸力が非常に低い発達状態, たいへん長期の時代) 2)奴隷社会 3)封建的社会構成体 4)資本主義的社会構成体——と解釈すべきであるとしている。(レートロー他編著 秋間実訳 [下] 大月書店, 1980. 385-392ページ)

クロッチェ Croce Benedetto (1866-1952) はこの時代区分を「1) 共産主義 (communism) 2) 奴隷制度を基礎とした経済時代 (slave organisation) 3) 農奴制度を基礎とした経済時代 (serf organisation) 4) 賃金制度を基礎とした経済時代 (wage-earning organisation) といいかえることもできる⁵⁵⁾」とわかり易く解説しているが——しかしスグ気が付くことは唯物史観の時代区分が意外に "単純" で "暗示的な判断の規範 (規準)" (クロッチェ) だということである。(なぜならば物的生産力の発展という点からみると、この4つの時代区分は実際の場合、連続する場合もあろうが、相互に混合する場合もあろうし、奇妙な恰好で連続したり混合したりする場合すらあるからである。)

またエンゲルスは『共産党宣言』の「1888年の英語版序文」で "アジア的" の意味を "土地を共有していた原始氏族社会" の意味と説明しているから「唯物史観によれば、人類はその社会生活において、原始共同体、奴隷制、封建制、資本制という4つの生産関係を経過し、現代はまたこの資本制から社会主義という新しい生産関係に向かって推移しつつある時代とみている⁵⁶⁾」ものといえよう。

ここで問題が出てくる。まず第一にマルクスは『経済学批判』の序言のなかで、"ブルジョア的生産関係は社会的生産過程の最後の対抗的形態" (die letzte antagonistische Form des gesellschaftlichen Produktionsprozesses) であって、ブルジョア社会の胎内に発展する生産力がその敵対関係解消の物質条件をつくり出すのだと述べ、資本主義社会の次にくる共産主義社会では、もはや拮抗関係すなわち生産力と生産関係との摩擦もない——搾取階級と被搾取階級との闘争もない——社会であるから "人間社会の前史はこの構成体とともに終りをつける" (schliesst daher die Vorgeschichte der menschlichen Geschichte ab) のだという。

これは歴史観としては、いかにも奇妙である。なぜなら、自然は人間の発生以前にすでに長い歴史的発展過程をもち、そのなかから意識的人間を生み出し

たのである。したがって自然と人間の間にはひきはなすことのできない連続がある。自然の歴史をはなれて人間の歴史を考えることはできないはずであり、共産主義社会の到来とともに"人間社会の前史が終る"——と一方的にきめつけて切断するのはいかにも奇妙である。さらに共産主義社会の到来によって——マルクスのいうように人類の前史が終って後史が始まって——ここに私有財産のない社会ができたとしてみよう。歴史は"流れ"であるから永劫の未来に向かって流れていくものである。その場合、社会はみずからの胎内に必然的に"否定するもの"を生み出すとすると——共産制の否定は私有財産制であるから——当然、もとの私有財産制度へ逆行することになるのではないか。ここに史観としての唯物史観の第一の限界が出てくる。

第二に、歴史的世界における運動とその発展とその根底には社会の階級性ならびに階級闘争という事実があるため——「人類の歴史の普遍的法則としては一定の限界をもち、原始共同体およびこれからの社会主義以後の歴史には適用⁵⁷⁾せられない」としている点である。わかり易くいうと、唯物史観は、イ)原始共同体社会や、ロ)来るべき共産主義社会には適用できないということである。イ)とロ)は例外だということである。これでは人間歴史を解明する史観としては不十分ではないのか。人間歴史を、1)原始共同体 2)奴隷制 3)封建制 4)資本制 5)社会主義（または共産主義）と5段階に分けるのはいいが、その2/5には唯物史観が適用しないというのは史観（歴史の原動力およびその作用様式についての見解）として不十分な史観ではないか。人口史観には、こういう限界は——前節（Ⅳ）で述べたとおり——いっさいない。

第三に、唯物史観は"歴史は生産力という自動機関車を先頭に、いくつかの車輛がひきずられて進む列車の進行のようなもの"（高田保馬）であって、しかも生産力の発展は自己運動的であり、それは人間意志の支配の外にあって固有の方向に向かって進むものとしている。これでは、資本主義社会の没落（崩壊）を強調力説する『資本論』の理論的展開とどう結びつくのか。論理的矛盾を犯しているのではないか。

要するに、生産力の発展を自己運動としてみるべき理論的根拠がないということになる。★

★ 人類は生産を知るまえに社会をなし、社会において生産を知ったのである。生産力としての物質的生産手段は主として道具化した技術であるが、それを人びとは個人として工夫（くふう）したのではない。ただ社会生活すなわち相互の交渉のあいだにおいてのみ、これを展開せしめた。生産力は自己運動者であるどころか、社会によって生まれ、社会によって変動する。生産力そのものがむしろ人口増加の結果なのである……自己運動者は生産力ではなくして人口である。人口の自己運動によってまず決定されるものは社会の形態すなわち人間関係の姿である。……それは社会の容量と密度 volume and density であり、質的構成 qualitative composition である。……要するに、生産は社会の中から生まれる。生産とは別の事情によって成立している結合が、生産の機能をとりいれることによって生産関係が成立する。（高田保馬、『マルクス批判』 弘文堂，昭和25年，120-21ページ，新カナ使いに改む）。

人間社会において、動くものは "人口" である。人口の力（the power of population）のみが自動的に動いて人間を増加せしめ、社会の容量（扶養力）を増大せしめる。それどころか生産力そのものがむしろ人口増加の結果なのである。このことは、人間が "生産なき時代" から "生産の時代" に入ることができた最初の段階を考えてみればスグわかることである。生産力の発展は自己運動でなくて、人口増加の単なる結果なのである。つまり社会という列車の機関車にあたるものは生産力ではなくて "人口" なのである。してみると、人口を人間歴史の根源的動力とみる人口史観の方が史観としてヨリ優れたものであるというべきではないか。

第四に、唯物史観では生産手段の変化（推移発達）にかんする歴史的記述が全くない。変化・推移の歴史的必然性を裏づける記述がぬけている。社会的生産諸力の発展に照応する歴史的発展の段階説は——仮りに認めるとしても——生産手段の変化・推移の歴史的説明が欠如している。この点、B. ラッセルは「マルクスの理論で何ととっても訂正を必要とするの

は、生産手段（方法）の変化（推移）の原因にかんするものである。マルクスにおいては、生産手段は主要原因としてあらわれているが、生産手段が時代とともに変化するその理由については、全く説明されていない。実際のところ、生産手段は、多くの場合、知的原因で変化している。科学的な発見や発明で変化している。マルクスは、発明や発見は経済的状况が要求するときなされると考えている。これはしかし全く非歴史的な見解である。アルキメデスの時代からレオナルドの時代まで、実験科学が実際上にもなかったのはなぜか。アルキメデス以後6世紀にわたって、経済的条件は科学的な仕事を容易にさせうるほどのものであった。現代産業をみちびいたものは、ルネサンスがすぎて後の科学の発達であった。経済的な経過にたいするこうした知的な因果関係（intellectual causation）をマルクスは十分に認識していない⁵⁸⁾という。要するに、唯物史観では生産手段（方法）の推移変化にかんする歴史的必然性の説明が全くなされていない。これでは史観として十全なものとはいえないのではないか。この点、人口史観の場合では——原始人でも、アルキメデスの時代の人間でも、現代人でも、人間の生殖手段（性行為、繁殖行為）に格別に大きな変化はないのだから、史観としては、あらゆる時代に例外なく、共通して適用できる。史観として比較した場合、唯物史観より人口史観の方がより優れた史観であるといえるのではなかろうか。

結びにかえて

以上、亡き南先生の念願されつつ惜しくも果しえなかった人口史観と人口哲学について、その概要のみを述べたつもりである。まず（I）[ヴィーコのこと]、a)1668年イタリアのナポリの本屋の息子として生まれ1744年同じ町で死んだヴィーコ（たいへん不幸な生涯を送った人で、人間歴史の理解のためには社会の文化諸相に1つの連続があることを認識する必要を

説いた）という思想家があらわれて『新しい学』（初版1725年，第2改訂版1730年，増補版1744年）を書いたこと。この書物がフランスの大歴史家ジュール・ミシュレ Jules Michelet（1798-1874）によって西欧の隅々にまで伝えられ広められ，ヴィーコの歴史哲学はカント，ヘーゲル，ゲーテはもとよりマルクスやエンゲルスらにも強烈な影響を与えたこと。b) マルサスは1788年春頃，ケムブリッジ大学生活の終り頃（22歳時），ギボンの『ローマ帝国衰亡史』を読んで歴史学に興味を抱く。さらに歴史学とは何かを知る必要上ヴィーコを学ぶことによって，“人口”を歴史発展の起動因とする歴史哲学（人口史観）の構想を抱く。c) ヴィーコにならって原理→命題→史観形成がおこなわれる。つまりマルサスの『人口原理論』はヴィーコの『新しい学』の指示どおり書かれていること。（Ⅱ）〔生の生産と再生産のこと〕a) 『ドイツ・イデオロギー』における“生の生産と再生産”を注意深く読むと，若きマルクスとエンゲルスは人間歴史の前提として，イ)生活資料の生産とロ)種の繁殖（人口増加）の2つを前提していた。ところが彼らは，このイ)，ロ)を“二重にして1つ”の関係としてとらえ，物的生産力の発展を歴史の唯一の動因とする唯物史観のみを構想提唱した。しかし，生産力は人間が増加することによって，衣・食・住の必要に迫られて——人口増加に引っ張られて，お互いに知恵を合わせることによって——発展するものであるからイ)，ロ)の関係は“二重にして1つ”の関係ではない。もしロ)の“人口”増加を歴史の動因とする歴史観を考えれば人口史観に気付いたに違いない。（この点，彼らの若気の過ちがあった。生産力は自己発展するものでなく，人口こそ自己発展するものであることに気付いたであろう。）b) ここで人口史観が“唯物史観と隣り合わせの，しかも全く異なった歴史観”であるという意味がヨク納得できるということ。（Ⅲ）〔唯物史観と人口史観の比較のこと〕a) 唯物史観と人口史観を比較してみると，唯物史観は——確かに史学上でも社会学上でも価値多いすぐれた歴史観ではあるが——幾多の限界をもつ。その点では人口

史観の方が史観として限界もない。人口様式の使用をすれば、人間歴史解明の上でヨリすぐれた史観であるというべきである。人口原理から人口史観を構想していたマルサスはさすがに偉大な歴史哲学者であったと断言できる。b)人口史観は礎石として人口哲学をもつ。つまり "人口史観がすぐれた歴史哲学であること" を証明したということは、人口と哲学が堅く結びつきうるものであることを証明したことにはかならない。

小論が亡き南先生のご期待に添いうるものかどうか——こんにち窺い知ることができないことが残念であるが——亡き先生の学恩を偲びつつ、謹んで小論を亡き先生の霊前に捧げる。(平成元年，彼岸日)

- 注 1) Budge. S, *Das Malthus'sche Bevölkerungsgesetz und die theoretische Nationalökonomie der letzten Jahrzehnte*, Karlsruhe, 1912, S.6. 傍点引用者
- 2) Russel. B, *Freedom and Organization 1814-1914*, Sixth Impression, George Allen & Unwin LTD 1978 p.94.
- 3) Malthus, T. R., *An Essay on the Principle of Population*, 1st. ed., London 1798 (anonymous) マルサス『初版 人口の原理』 高野岩三郎 大内兵衛訳, 岩波文庫 昭和25年 11ページ
- 4) Malthus, T. R., *An Essay on the Principle of Population*. Preface to the 2nd ed., (dated June 8. 1803) マルサス『人口論』 第2版序文(『世界大思想全集』18 伸永文三訳 春秋社 昭和2年1ページ所収) 傍点引用者
- 5) 清水幾太郎「私のヴィーコ」(『世界の名著』33『ヴィーコ』中央公論社 1974年 34ページ所収)
- 6) H. Cunow, *Die Marxsche Geschichts-Gesellschafts-Staatstheorie*, Verlag von J. H. W. Dietz Nachf. 1921. Band 2. S.169.
- 7) *ibid.*, S.170.
- 8) *ibid.*, S.172.
- 9) Malthus, T. R., *An Essay on the Principle of Population*, London 1798 (anonymous) マルサス『初版 人口の原理』前掲書 11ページ
- 10) ヴィーコ「新しい学」(世界の名著33『ヴィーコ』清水純一, 米山喜晟訳, 中央公論社 1979年 157ページ所収)

- 11) *An Essay*, 6th. ed., Book II. Chapt. XII. p.314. 邦訳 第6版 第2編 第13章「上記の社会観察からの一般的推論」（『人口原理論』中大出版部 360ページ所収）
- 12) 南 亮三郎編『人口大事典』平凡社 昭和32年 118ページ
- 13) 南 亮三郎編『人口思想史』千倉書房 昭和47年 3ページ
- 14) Malthus, T. R., *An Essay on the Principle of Population.*, 6th. ed., London 1826 Book II. Chapt. XII. p.314. 邦訳 中大出版部 360ページ
- 15) *ibid.*, Book I. Chapt. II. p.16. 邦訳 前掲書 14ページ
- 16) *ibid.*, Book I. Chapt. II. p.17. 邦訳 同 14-5ページ
- 17) 南 亮三郎編『人口政策』千倉書房 昭和50年 65ページ
- 18) A. Stern, *Philosophy of History and the Problem of Values*. Mouton & Co's-Gravenhage, 1962 p.71.
- 19) *ibid.*, p.66.
- 20) F. Meinecke, *Die Entstehung des Historismus*. マイネッケ『歴史主義の成立』菊盛英夫ほか訳 筑摩書房 1985年 53ページ
- 21) *ibid.*, 同邦訳 195-6ページ
- 22) K. Marx, *Thesen über Feuerbach*, M. E. W. Bd.3. S.5. マルクス「フョイエルバッハにかんするテーゼ」（『全集』第3巻 真下信一訳 3ページ所収）傍点原著者
- 23) *ibid.*, S.7. 邦訳 5ページ 傍点原著者
- 24) F. Engels, *Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft (Anti-Dühring)*, M. E. W. Bd.20. S.132. 『全集』第20巻 「反デューリング論」村田陽一訳 147ページ
- 25) D. Riazanov, *Karl Marx and Friedrich Engels*, Monthly Review Press. 1973 p.54.
- 26) B. Croce, *Historical Materialism and the Economics of Karl Marx*, George Allen & Unwin LTD, 1922, p.83.
- 27) K. Marx und F. Engels, *Die Deutsche Ideologie*, M. E. W. Bd.3. S. 20. 『全集』第3巻 真下信一訳 16ページ 傍点原著者
- 28) *ibid.*, S.21. 邦訳 17ページ 傍点原著者
- 29) *ibid.*, S.28. 邦訳 23ページ
- 30) *ibid.*, S.29. 邦訳 25ページ 傍点原著者
- 31) *ibid.*, S.20-1. 邦訳 16ページ
- 32) *ibid.*, S.21. 邦訳 17ページ
- 33) F. Engels, *Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staats*, M. E. W. Bd.21. S.27-8. エンゲルス「家族・私有財産および国家の起源」（『全集』第21巻 村田陽一訳 27ページ所収）

- 34) K. Marx und F. Engels, *Die Deutsche Ideologie*, *op.cit.*, S.30.邦訳25- 6
ページ
- 35) H. Cunow, *Die Marxsche Geschichts-Gesellschafts-und Staatstheorie*,
op. cit., S.140. 傍点引用者
- 36) I. Kant, *Mutmasslicher Anfang der Menschengeschichte*, I. Kant,
Werkausgabe XI . Herausgegeben von W. Weischedel, Suhrkamp
Taschenbuch Verlag. 1968. S.86. カント「人間歴史の臆測的起源」(『全
集』第13巻 昭和63年 小倉志祥訳 108ページ所収)
- 37) *ibid.*, S.87. 邦訳 109ページ 傍点原著者
- 38) *ibid.*, S.87. 邦訳 110ページ
- 39) *ibid.*, S.87. 邦訳 112ページ 傍点原著者
- 40) G. Mackenroth, *Bevölkerungslehre*. Springer-Verlag 1953. S.325. マッ
ケンロート『人口論』南 亮三郎監修, 中大出版部, 昭和60年 388ページ
- 41) *ibid.*, S.331. 邦訳 394ページ
- 42) P. M. Hauser, *World Population and Development. Introduction and
Overview*, Syracuse University Press 1979 S.7.
- 43) P. Mouchez, *Démographie*, Presses Universitaires de France, 1964.
- 44) 岡田 実「人口思想史の方法」(『人口学の方法』人口学研究シリーズⅣ
千倉書房 昭和53年 81ページ所収)
- 45) C. P. Blacker, *Stages in Population Growth*. The Eugenics Review,
Vol.39. No.30. Oct. 1947 p.88-102.
- 46) A. Landry, *La Révolution Démographique*, Paris. 1934. p.44f.
- 47) I. Kant, *Idee zu einer allgemeinen Geschichte in weltbürgerlicher
Absicht*. Kant Werkausgabe XI . *op. cit.*, S.33. カント「世界市民的意図
における普遍史のための理念」(『全集』第13巻 前掲書 15ページ所収)
- 48) *ibid.*, S.33. 邦訳 15ページ 傍点原著者
- 49) *ibid.*, S.33. 邦訳 15ページ
- 50) *ibid.*, S.34. 邦訳 16ページ 傍点原著者
- 51) *ibid.*, S.37. 邦訳 20ページ 傍点原著者
- 52) *ibid.*, S.45. 邦訳 29ページ
- 53) I. Kant, *Mutmasslicher Anfang der Menschengeschichte*, *op. cit.*, S.
86. 邦訳 前掲書 108ページ 傍点原著者
- 54) 南 亮三郎 『人口法則と生存権論』 同文館 昭和3年 101ページ
- 55) B. Croce, *Historical Materialism and the Economics of Karl Marx*,
op. cit., p.90.
- 56) 柳田謙十郎『唯物史観』創文社 昭和31年 94ページ
- 57) 同書 104ページ 傍点引用者
- 58) B. Russell, *Freedom and Organization*, *op. cit.*, p.230.